



<http://www.pragmatics.gr.jp>

No.50 / Fall 2023

会 長 滝浦 真人

事務局 〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町 1-8 大阪大学 秦かおり研究室内

事務局連絡先 secretary-at-pragmatics.gr.jp

郵便振替口座 00900-3-130378 口座名:日本語用論学会

ゆうちょ銀行口座 記号・番号:00900 - 130378 日本語用論学会

支店番号:099(店名:〇九九) 当座預金 口座番号:0130378 日本語用論学会

語用論研究の新潮流 (9)

用法基盤の言語学

堀内ふみ野 (日本女子大学)

2009～2014年、一般企業に勤務していた私は、メーカーのソフトウェア開発部門でマニュアル制作の業務をしていた。当時注目され、ソフトウェアやマニュアルの設計に適用されはじめていたのが、「人間中心設計」(Human Centered Design)の考え方だ。この考え方や発展の流れはどこか、語用論や、認知言語学における用法基盤のアプローチと重なるように感じていた。

人間中心設計は、「靴に足を合わせるのではなく、足に合う靴を作る」とたとえられる、ユーザー体験を中心に据えたデザイン哲学だ。一見当たり前に思われるかもしれないが、以前のソフトウェア開発はしばしば「技術ありき」で、新しい技術が活きる機能を設計者側が検討・開発する流れで行われた。しかし、技術者目線で開発された機能は、ユーザーの使用実態に合わないことがあった。時代的にも、技術の発展が一定の飽和状態を迎えて他の付加価値が模索されはじめた中で、「技術中心から人間中心へ」という変化が生じた。ユーザーの使用場面を把握し、ユーザー体験の向上に必要な機能を設計する、ボトムアップの発想への転換だ。

場面や文脈を重視する考え方は、語用論、そして私が研究の枠組みとしている用法基盤モデ

ル(Langacker, 1988, Barlow and Kemmer, 2000)の考え方に通じる。用法基盤モデルは、言語知識が実際の使用経験からボトムアップで形成されるという立場をとり、コミュニケーションの文脈の中で繰り返して起こるパターンが文法に反映されると考える。場面や文脈に埋め込まれた「使用の中の言語」を考察する点で、語用論とも親和性の高い言語観だ。用法基盤モデルは、経験を重視するからこそ、経験差による知識の個人差を認め、同一話者でもその時々場面、使用域、スタイルなどに応じて異なる文法知識を活性化させていると考える。言い淀み、言いさし、言い間違い、規範からの逸脱など、文法的には「不適切」だが実際には観察される表現も考察対象に含め、その中にも何らかの規則性や体系性を見出そうとする(大谷・中山, 2020)。これは、文法知識を単一の体系とみなし、「理想的な母語話者」(Chomsky, 1965)の頭の中にある文法を探求する、伝統的な言語研究の立場と対照的だ。

私が関わっていた人間中心設計でのソフトウェア開発でも、ユーザーの具体的な経験を考慮することが非常に重視された。典型的なユーザー像を「ペルソナ」として複数設定し、ユーザーが製品を使用する場面のストーリー(ユースケース)を何通りも考え、製品の機能やマニュアルの構成を検討した。ペルソナは、「30～50代、会社員」のような包括的な記述ではなく、氏名、年齢、居住地、家族構成、趣味、休日の過ごし方などの詳細な情報を含む、リアリティがある個人として設定される。その個人の

行動を考えると、忙しいので面倒な機能は使わない、手順が多いと間違える、多少効率が悪くても慣れたやり方を選ぶなど、理想化されたユーザー像とは異なった、実際の人間姿を想像しやすくなる。抽象化・理想化された「誰か」ではなく、特定の個人が身を置く具体的な環境を考え抜く志向は、ソフトウェア開発であれ言語研究であれ、使用を重視する立場をとることの自然な帰結である。同時に、常に心に留めるべき重要な視点であるように思う。

一方で、言語の多様な使用場面を考慮した分析を実践するのは、簡単なことではない。崎田・岡本(2010: 9)は、認知言語学の伝統的な研究に対し、用法基盤の原則に基づいて言語使用に注意を払ってきたとはいえ、実際の研究の焦点は単一の文や命題に限られ、自然談話が扱われることは少なかったと指摘している。それから10年以上がたち、認知言語学における用法基盤の研究でも、少しずつ研究の焦点が談話の単位や話しことばへと広がりつつある。構文文法の概説書である Hilpert(2019)の第2版では、第1版に含まれていなかった話しことばの構文に関する章が追加され、大谷・中山(2020)では、用法基盤の考え方を共通項とし、認知言語学と、話しことばの談話構造や相互行為をより重視する談話機能言語学との接続が図られた。日々の言語使用の中で話しことばが占める割合は大きく、先行発話や非言語情報、対人関係といった多様な文脈的要素との関わりの中で展開する自然会話は、書きことばとはまた異なるかたちで言語と文脈の関係を示してくれる。実際の使用を中心に据える言語研究を進める上で、話しことばを観察する方向性は重要であり、動画付きの自然会話コーパスの整備も進んだ今、さらにその傾向は強まると予測される。

最後に、実際の使用経験を重視する立場をとる上で忘れてはいけないのが、使用は常に変化するということだ。ペルソナは、一度作って終わりではなく、常に見直し更新するべきものとされる。言語も常に変化する動的な体系であり、変化に応じて分析の枠組みも更新することが必要だろう。例えば、近年の急速なデジタル化は、キーボードなどで打たれインターネット上で発信される「打ちことば」(田中, 2014)の使用拡大をもたらした。「打ちことば」では、規範的な書きことばとも話しことばとも異なる独自の文法構造が散見される。「全身で走っているぞー! な感覚」「良い話だったね、な感じ」といった、発話的な構造が連体活用語尾「な」の前におかれる[<発話>、な名詞]という修飾構造は、その一例であろう。「打ちことば」

の使用経験は、コミュニケーションのあり方を変えるだけでなく、文法意識にも変化をもたらす。さらに、「打ちことば」では、従来の言語研究で主要な考察対象となつてこなかった絵文字、句読点、改行、スペースなどの視覚的要素も、構文を構成する要素(意味の違いに貢献する言語形式の一部)になっている可能性が高い。オンライン・コミュニケーションで起きている現象を分析に取り込み、研究の枠組み自体をアップデートしていくことは、今後の語用論や用法基盤の言語研究を進展させる、一つの重要な方向性になりうる。

ソフトウェアの世界では、時代の変化に対応していく中で、人間中心設計での開発が促され、ユーザー体験が向上した。変化への適応は、あらゆる意味で労力がかかる。しかし、データや使用の変化に対応していくことこそが、言語研究を進展させる鍵となるのではないだろうか。

参考文献

- Barlow, Michael, and Suzanne Kemmer. 2000. *Usage-based Models of Language*. The University of Chicago Press.
- Chomsky, Noam. 1965. *Aspects of the Theory of Syntax*. The MIT Press.
- Hilpert, Martin. 2019. *Construction Grammar and Its Application to English*, 2nd edition. Edinburgh University Press.
- Langacker, Ronald W. 1988. A usage-based model, In Brygida Rudzka-Ostyn (ed.) *Topics in Cognitive Linguistics*. pp. 127-161. John Benjamins.
- 大谷直輝・中山俊秀. 2020. 「用法基盤モデルの言語観」. 中山・大谷(編)『認知言語学と談話機能主義の有機的接点: 用法基盤モデルに基づく新展開』pp. 3-25. ひつじ書房.
- 崎田智子・岡本雅史. 2010. 『言語運用のダイナミズム』研究社.
- 田中ゆかり. 2014. 「ヴァーチャル方言の3用法: 「打ちことば」を例として」. 石黒圭・橋本行洋(編)『話し言葉と書き言葉の接点』pp. 37-55. ひつじ書房.

* * PSJ26 (第26回大会) ご案内 * *

2023年度の第26回大会(主催:日本語用論学会、後援:日本語教育学会)は、対面方式を基本としつつ、一部のプログラムはオンラインでも配信する形式で開催いたします。今回も、多くの会員の皆様から研究発表のご応募をいただき、

ワークショップ2件、口頭発表30件、ポスター発表6件が採択となりました。詳細は、会員メーリングリスト、学会ウェブサイトにて随時お知らせいたします。

◆日時：12月9日(土)、10日(日)

◆場所：創価大学中央教育棟

〒192-8577 東京都八王子市丹木町 1-236

※大会に参加するには、事前参加登録が必須となります。詳細は学会ウェブサイト・MLでお知らせしますが、期間内に事前参加登録(参加費納入を含む)をお願いいたします。

◆参加費(事前参加登録)：

語用論学会会員：1,000 円

日本語教育学会会員：1,000 円

語用論学会学生会員(院生・学部生)：無料

日本語教育学会会員(院生・学部生)：無料

非会員一般：2,000 円

非会員院生：2,000 円

非会員学部生無料

※オンラインで参加される場合、事前参加登録をした方に Zoom 情報をお知らせいたします。

※事前参加登録や参加費の入金方法は11月上旬を目途に皆様にご案内する予定です。

※会場で参加費の支払いはできません。必ず事前に納入を済ませてください。

◆懇親会費(予定)：

一般会員・非会員 5,000 円

学生会員 4,000 円

※懇親会の参加申込は会場で行います。懇親会費もそちらでお支払いください。

◆大会テーマ

「日本語教育のために語用論ができること」

◆主なプログラム(予定)

《12月9日(土)》

午前：特別講義・ワークショップ

午後：研究発表①・総会・基調講演・懇親会

《12月10日(日)》

午前：研究発表②・ポスター発表

語用論茶室

午後：シンポジウム・大会発表賞表彰式

【特別講義】

CHEN Xinren (Nanjing University)

“Relative Effectiveness of Deductive and Explicit-Inductive Pragmatic Instruction: New Evidence from a Case Study”

【基調講演】

「日本語学習者による日本語の理解過程—理解困難点と推測技術—」

野田尚史(日本大学)

【シンポジウム】

テーマ：

言語コミュニケーション能力の「評価」をめぐる

趣旨：

本シンポジウムが目指すのは、語用論を臨床・教育の現場で応用可能な実践理論として学際的に発展させることである。そこで、そうした実践の場で追求されている、言語コミュニケーション能力の「評価」に焦点を当て、その多様性・多元性について議論したい。具体的には、学習者の言語運用能力の熟達を目指す言語教育(日本語教育学・英語教育学)と、子どもたちの言語コミュニケーション能力の発達を測るコミュニケーション障害学、の各分野において、どのように評価軸・評価次元が定められ、どのような評価手法が開発されているか、さらには、現状でどのような困難が生じているのか等について最新の研究動向を紹介する。

発表内容：

【発表1】日本語教育における評価の現状と課題
李 在鎬(早稲田大学)

日本社会の変化に応じて、日本語教育の目標は変化してきた。とりわけ「評価」ということに関していえば、「日本語について何を知っているのか」という観点から「日本語を使って何ができるか」という観点へとシフトしてきたと言える。こうした言語能力観・コミュニケーション能力観の変化は、日本社会の多文化共生化の進行に応じて、さらに加速化することが予想される。本発表では、こうした現状を踏まえ、今後の日本語教育の評価研究ではどのようなアプローチが必要かについて考える。

【発表2】プロジェクト型英語教育における評価の難しさの可能性

木村 修平(立命館大学)

立命館大学では2008年度より4学部でプロ

プロジェクト発信型英語プログラム (PEP) という特徴的な英語プログラムが実施されている。プロジェクト型学習の手法を採るこのプログラムでは「読む」「聴く」「書く」「話す」という従来型の4技能では捉えきれないあらたなスキル観・能力観を見出している。それは、プロジェクトに必要な情報を調べる「リサーチ」、調べた情報をまとめる「オーサリング」、他者と意見や評価を交換する「コラボレーション」、プロジェクトの進捗や成果を発表・表現する「アウトプット」という「新しい4技能」だ。これらは従来型4技能に比べて評価が難しいが言語教育の分野に新たな地平を拓く可能性がある。

[発表3] CCC-2 と TOPJC : 臨床的な目的のための語用能力発達評価法

大井 学 (金沢大学)

語用能力発達評価の信頼性・妥当性を備えたツールは、Bishop (2003) が開発し数十か国で利用中の、親・担任の報告に基づく The Children's Communication Checklist-2 (CCC-2) のみである。演者は CCC-2 日本版を標準化し、3-15 歳児の各年齢集団内位置を特定する手段として実用に供している。加えてオンライン語用能力課題への反応に基づき、4-15 歳児の各年齢集団内位置を特定する、ことばのつかいかたテスト (TOPJC) を開発、標準化の上実用に供する予定である。二つの評価法の概要、それらにより把握される語用能力発達過程、ASD 児者と定型発達児者との関係について述べる。

【オンライン配信について】

すべてのプログラムは対面で行われますが、特別講義・基調講演・シンポジウムはオンラインでも配信いたします。

【発表賞について】

例年の通常開催と同様、口頭発表、ポスター発表において事前に発表賞の審査を受けることを申告している発表者が対象となります。

◆No Show に対する措置

発表が採択されたにもかかわらず、大会当日に大会発表委員会に無断で発表を行わない場合やポスターの掲示のみで説明を行わない場合は、これらを「No Show」とみなし、学会ウェブサイトにて公表します。ただし、事前、または、当日に (やむをえない場合には事後に)、発表を行えない (行えなかった) 合理的な事情の説明がある場合には、「キャンセルされた発表」とします。

◆第 26 回大会会場・創価大学への交通・宿泊について

[大会会場について]

会場：〒192-8577 東京都八王子市丹木町 1-236 創価大学



最寄駅・所要時間：JR「八王子駅」・京王線「京王八王子駅」からバスで約 20 分

<https://www.soka.ac.jp/access/>

【交通について】

★JR 八王子駅北口のバスロータリー11, 12 番乗り場 (土曜日 12:30 までは 14 番乗り場)、または京王八王子駅 4 番乗り場から、以下の行き先のバスにご乗車ください。

- ・「創価大学正門東京富士美術館」行き
- ・「創価大学循環」
- ・「創価大学栄光門」行き (直通)
- ・「創価大学正門経由工学院大学」行き

※「八日町経由」と「ひよどり山トンネル経由」があります。乗車時間が短いのは「ひよどり山トンネル経由」です。

八王子駅北口乗り場	
JR 八王子駅北口 11 番 (八日町経由)・12 番 (ひよどり山トンネル経由)	平日・土曜の朝晩から 12:30 までは 14 番
日曜・祝日の 12:30 までは 4 番乗り場	日曜・祝日の 12:30 以降は 11 番 (八日町付込)・12 番乗り場 (ひよどり山トンネル経由)
京王八王子駅 4 番	

創価大学への路線バス系統	
16 号 06	八日町経由創価大循環 約 15～30 分間隔
04	ひよどり山経由創価大循環 朝・夕に定数
02	ひよどり山トンネル経由 朝・夕に定数 約 15～30 分間隔 「循環」創価大正門
02	創価大正門発・戸倉発 八日町経由八王子駅行 夕方～夜間 上りのみ運行



〔宿泊について〕

JR「八王子駅」・京王線「京王八王子駅」周辺が便利です。

＊ ＊ 研究会コーナー ＊ ＊

◆メタファー研究会

- ・長らくお待たせしています『メタファー研究』第3号（ひつじ書房）は、現在編集中です。充実した内容でお届けしますので、もうしばらくお待ちください。
- ・研究会の次回イベントは、2024年3月開催を目指して検討・調整中です。メタファー研究会 Web サイト (<https://sites.google.com/site/metaphorstudy/>)で随時告知します。積極的なご参加をお願いいたします。（杉本 巧）

＊ ＊ 委員会・事務局より ＊ ＊

★『語用論研究』編集委員会より

先般『語用論研究』がオンラインジャーナルとなることが決定し、オンライン版第一号発公開に向けての原稿募集が行われ、論文12本、研究ノート3本の投稿がありました。現在編集委員会で厳正な外部査読を行っております。また、招待論文、書評も掲載予定しております。副委員長の吉田先生、松井先生と編集委員の先生方のご協力を仰ぎ、現在のところ滞りなく作業が進行しております。

オンライン化は、これまでのように紙媒体の『語用論研究』がお手元に届く形ではなくなることを意味します。その代わりに、『語用論研究』

に掲載される論文は、J-stage (<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/sls/list/-char/ja>) という、電子ジャーナルが無料公開されるプラットフォームを通じて全世界に向けて即時公開されることとなります。どのようなイメージになるかは、語用論学会に先行してオンライン化された言語科学会(JSLS)のジャーナル Studies in Language Sciences (SLS) の最新号をご覧ください (<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/sls/-char/ja>)。

紙媒体のジャーナルは、複数の論文がまとまった形で表紙、目次、奥付つきで一冊の書籍として刊行されるというオンラインジャーナルにはない利点があります。一方で、紙媒体のジャーナルは会員（個人、団体）に配布されるものであり、その点で公開範囲が限定されています。これに対して、オンラインジャーナルは、即時に全世界に対して公開されるため、アクセシビリティ、速報性において勝っています。オンライン化によって、『語用論研究』に掲載されるすぐれた研究論文が国内外の語用論研究者のコミュニティに届きやすくなることは、執筆された研究者個人にとっても、語用論学会にとってもメリットが大きいと考えます。

今後の課題として、『語用論研究』は、投稿論文数、投稿論文のテーマのバリエーションという点でまだまだ「伸びしろ」があるという印象を持っております。次号以降、投稿論文が増え、より多様なテーマの論文が投稿されることを期待しております。会員のみなさまにおかれましては、今回のオンラインジャーナルへの移行を機に、オリジナルな研究成果をぜひ『語用論研究』にご投稿いただけることを祈念いたします。

（編集委員長・副会長 堀江薫）

★大会総務委員会プロシーディングス担当より

日本語用論学会では、2005年度第8回大会より『大会発表論文集』(Proceedings) を発行しておりますが、2022年度第25回大会の論文集（第18号）は、本年8月に学会のホームページで公開されました。

以下、掲載された論文数をご報告いたします。

シンポジウム発表 3本

研究発表（日本語）20本

研究発表（英語）7本

合計で30本が掲載されました。

原稿をご提出いただいた会員の方々には、ご協力いただき誠にありがとうございました。

（八木橋宏勇）

《事務局より》

★《新刊・近刊案内》★

★会費納入のお願い

年会費は、一般会員 6,000 円、学生会員 4,000 円、団体会員 7,000 円です。よろしくお願ひ申し上げます。学会口座は以下のとおりです。

【郵便振替】

口座番号：00900-3-130378

口座名：日本語用論学会

【ゆうちょ銀行】

支店名：099

口座種類：当座

口座番号：130378

口座名：日本語用論学会

学会ホームページの「会員専用ページ」より、クレジットカード決済も可能です。会員ステータス、会費納入、会員専用ページへのログイン等に関するお問い合わせは、事務局ではなく、下記までお願いいたします。

日本語用論学会 会員管理室

E-mail: psj-at-outreach.jp

★令和 3 年以降の激甚災害ならびに新型コロナウイルスによる影響を受けられた皆様へ

日本語用論学会では、激甚災害に指定された豪雨の被害に遭われた会員の皆様に対し、お申し出いただくことにより当該年度の会費ならびに当該年度年次大会の参加費を免除いたします。被災された皆様方の一日も早い復興を心からお祈り申し上げます。

また、「新型コロナウイルス感染症」の直接・間接的影響による著しい経済的な影響を被っている会員の皆様におかれましては、以下の連絡先にまずはご相談ください。

日本語用論学会事務局

〒560-0043

大阪府豊中市待兼山町 1-8

大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻

秦かおり研究室内

E-mail: secretary-at-pragmatics.gr.jp

(事務局長・秦 かおり)

■『若者言葉の研究 SNS 時代の言語変化』堀尾佳似 (著) 九州大学出版会 (定価 3,000 円+税)



本書は博士論文としてまとめられた研究をもとに、自然談話、新聞、雑誌を言語資料とし、1990年代から2000年代の若者言葉の変化を記述し、通時的に分析したものである。充実したデータの分析からは、現代日本語の変化の規則性があぶりだされ、今後の貴重な言語

資料としても役立つ一冊となっている。そして、楽しく読むことができる一冊でもある。事例として挙げられている若者言葉の分析からは、創造力豊かに、時に他者への配慮をもって、日本語を柔軟に操られる様が見取れ、言語の面白さが伝わるものである。全7章と補遺からなる構成だが、巻末資料として掲載された言語データを見ると、若者言葉が一覧で見ることができる貴重なページが続き、さらに楽しむことができる。また、データを収集し分析する手順が丁寧にまとめられているため、研究方法についてのヒントも与えてくれる書となっている。(2022.4.22刊)

■『エスノメソドロジー・会話分析ハンドブック』

山崎敬一・浜日出夫・小宮友根・田中博子・川島理恵・池田佳子・山崎晶子・池谷のぞみ(編) 新曜社 (定価 4,200 円+税)



エスノメソドロジー・会話分析 (EMCA) という学問分野における主要な概念、研究トピック、そして学説史についての概説をまとめた野心的な一冊。全体は40章 (うち7章はセクションごとに設けら

れた総説) から成り、その中の5章はガーフィンケルやサックスといった EMCA の巨匠たちによる文章の邦訳である。本書に携わった著者の数は (邦訳章の原著者も含めれば) 40 名を越えており、EMCA という学問分野の広がり一望できる快著と言えるだろう。本学会の中でも会話分析(CA)の存在感が年々増しているが、言語学

を背景とする研究者にとって、CAの源流であるエスノメソドロロジー(EM)の学説史や、EMと密に関連したCAの論考は、必ずしも接近や咀嚼が容易ではないかもしれない。「ハンドブック」と題された本書は、まさに折に触れて手に取りやすい編集になっており、多くの語用論研究者が重宝する一冊となるだろう。(2023.4.24刊)

■『小説の描写と技巧-言葉への認知的アプローチ』山梨正明(著) ひつじ書房(定価3,400円+税)



本書は認知言語学の枠組みで文学作品を分析する可能性を示した研究書である。文学的な叙述スタイルは日常言語とどのように異なるか、作家固有の表現スタイルはどのようなところに現れるか。これらの興味深い問題を、言語表現の選択に反映される、語り手ないしは作家の認知モードという観点から分析している。本書で特に注目されるのが小説における「描写」の役割である。風景や対象の描写には、その小説のスタイルに寄与する語り手の主観性が強く関わっているとみられる。本書では横光光一、川端康成などに代表される「新感覚派」の小説と、ハメットやチャンドラー、村上春樹などに代表されるハードボイルド系の小説を例に、それぞれのスタイルを特徴づける描写とその修辭的効果が考察される。さらには『不思議の国のアリス』など幻覚や妄想を描いた文学作品の分析を通して、叙述の病理的な側面にも光が当てられるのが特徴である。

(2023.5.31刊)

■『日本手話で学びたい!』佐野愛子・佐々木倫子・田中瑞穂(編) ひつじ書房(定価1,700円+税)



本書は、近年日本のろう教育において、聴者にとっての母語となる音声/書記日本語とその文法体系に依拠する手指日本語(日本語対応手話)が過度に用いられ、ろう児/ろう者にとって本来の母語と言える日本手話がないがしろにされていることを指摘し、関連する専門家の意見を集約した上でこの状況を改善するため

の提言を行うものである。本書を通して、手話やろう教育に詳しくない読者は、日本手話と手指日本語の違い、ろう児/ろう者にとっての書記言語の意義など、言われてみれば当たり前のことに衝撃を受け、またそうした「無知/無関心」が、近年のろう教育が抱える問題の温床となっていることに気付かされるに違いない。手話やろう教育についてだけではなく、言語とは何か、コミュニケーションとは何か、教育とは何かといったことを改めて考える良いきっかけとなる一冊でもある。(2023.7.31刊)

■『話し手・聞き手と言語表現—語用論と文法の接点—』吉田幸治(編) 金澤俊吾・鈴木大介・住吉誠・西田光一・吉田幸治(著) 開拓社(定価2,420円+税)



本書は、多くの良書を産み出している「言語・文化選書」の101巻目である。2018年に開催された日本英文学会のシンポジウムの内容を中心としており、各章単独で読むことも可能ながら、全体を通して語用論的な側面を多角的に理解できる読み物となっている。

母語話者であればつい無意識的に行っているであろう言語行動の営みを、学問的に見るとどのように分析できるかがよくわかる。調査分析方法も多岐にわたっており、文の文法的な解説からコーパス調査まで、これから研究に取り入れていきたい人にとってありがたい一冊となっている。(2023.9.19刊)

■『AI時代に言語学の存在の意味はあるのか?—認知文法の思考法—』町田章(著) ひつじ書房(定価2,200円+税)



驚異的なスピードで進化しているAIは、理論言語学や語学教育にも大きなインパクトを与えており、じわじわと変革を迫ってきている。「AI時代に言語学の存在の意味はあるのか?」という問いに対し、言語学者の存在を脅かす脅威になっていることを認めつつも、筆者は認知文法の思考法をもって「AIと理論言語学・語学教育は協働の関係もしくは共進化の関係にある」と主張し、その在り

を認めつつも、筆者は認知文法の思考法をもって「AIと理論言語学・語学教育は協働の関係もしくは共進化の関係にある」と主張し、その在り

方について提言を行っている。本書は、12の章と7つのコラムから成り、丁寧かつ明快に論が紡がれているため、比較的容易に読み切ることができるように思われる。しかし、各章のあちこちに潜む示唆に富む記述に目を留め、自身の言語観に照らして考えてみると…そう簡単には「読み切った」とは言えないほど思考がフル回転させられていることに気づく。本書は、ひつじ書房のウェブマガジン「未草」に連載された「認知文法の思考法—AI時代の理論言語学の一つのあり方—」（2019年10月から2021年7月）に加筆修正を加えたものである。こちらも参照しながら本書を読んでもみると、AIがごく短期間のうちにいかに進化しているかを実感させられる。(2023.9.8刊)

★広報委員会からのお知らせ

会員諸氏に広くお知らせしたいと思っておりますので、語用論関連の新刊書・近刊書の情報があれば広報委員会宛にお寄せください。ご自身の著作はもちろん、恩師・同僚・友人・指導学生の出版物、比較的目にとまりにくい日英語以外での出版物なども歓迎します。なお、紹介文は出版社によるものを利用するほか、広報委員が執筆を担当しています。

PSJ members selected this section's recently-published and forthcoming books on pragmatics. We invite you to introduce books you recently published or highly recommend, to fellow members. Little-known books, and books written in your native language are especially welcome.

～編集後記～

■ WHOが正式にパンデミックの終結を宣言したものの、まだまだコロナ感染は身近であり、さらにインフルエンザも加わるという、なかなか厳しい状況ではあります。しかし徐々に対面学会も復活し、3年ぶりにお会いする方を会場で見かけては、「お久しぶりです～！」と走り寄っています。このような、人々を対面で繋ぐ世界に戻りつつある一方で、世界ではさまざまな戦争、紛争、侵略による分断が激しくなり、世の先行きはあまり明るいものとは言えないようです。研究者として、こうした世の中で何ができるか自問自答する日々です。(秦かおり)

■ 例年より猛暑日が長く続いたと言われていた日本の夏も終わり、秋を感じる季節になりました。紅葉や収穫、スポーツや読書など、楽しむことがひときわ多い秋ですが、これらの楽しいイベントよりも、暑かった夏を振り返り地球温暖化を意識させられる話題がなんだか多い気

がいたします。人々は日常生活の中で以前よりもはるかに環境に配慮するようになったと思います。一方、世界に目を向ければ、多様な出来事であふれており、「持続可能な地球」のためにすべきことが、本当にたくさんあるんだと思わされます。(野村佑子)

~~~~~

日本語用論学会 Newsletter 第50号

発行：日本語用論学会広報委員会

発行日：2023年11月1日

[広報委員会]

\* 委員長：秦かおり

\* Newsletter 編集担当：野村佑子

\* 公式ホームページ担当：

名塩征史・横森大輔

\* 会員メーリングリスト担当：

木本幸憲・八木橋宏勇

E-mail: [webmaster-at-pragmatics.gr.jp](mailto:webmaster-at-pragmatics.gr.jp)